新 アジアの風

県立大地域経済研究所報告

タイ―カンボジア国境のポイペト

新進出要所の一つに

春日 尚雄教授

以前、タイ―カンボジア国境の街コッコンについて書いた。海沿いのコッコンに対してポイペト（タイ側の街はアランヤプラテート）は内陸にあり、タイの首都バンコクからの距離は約250キロと比較的近い。その利便性もあり、ポイペトの「国境経済圏」はコッコンより、かなり大きい。その重要な「産業」であるカジノは、ポイペトでは10軒近いカジノホテルがあり、年間100万人以上ものタイ人が訪れるとされる。

今回はタイ側から入国したが、日本人を含めてビザが必要とされる外国人と、ビザなしで簡便に入国できるタイ人とで、入国管理が区分されている。カンボジアのアンコール遺跡で有名なシェムリアップでカジノが数年前禁止された影響もあり、ポイペトへカジノ目当てに訪れる外国人観光客はタイ人以外も増加しているようだ。

カンボジア側からは1日入国パスを得た労働者はタイ側で働き、夕方には再度カンボジア側に戻ってくる。農産物、雑貨などの商品などをタイ側のロンクルア市場で仕入れて持ち帰るカンボジア人行商人も同様である。人の往来はメコン地域でもかなり多い国境であり、トラック貨物も同じゲートを通過するため、かなり混雑している。現在その緩和策として貨物専用ゲートが少し離れたところに整備中であるのを確認した。

ポイペトのカジノホテルの一つ（筆者撮影）

近年、カンボジアにおいては外資企業を中心に、積極投資が行われるようになってきた。首都プノンペン以外では西のタイ、東のベトナムとの国境付近にカジノなどの施設や工業団地という、いわば国境をほさんだ形で経済圏ができていることが特徴的である。ポイペトにおいてもカジノ以外では、華人系カンボジア人出資のオーニアン工業団地が国境から直線で約10キロにあるが、数社の進出以外は周辺道路も未整備である。ポイペト周辺はタイの中小企業の立地が多いとされているが、日系企業では日本電産が単独で進出しているのが例外的な事例である。

ポイペトは南部経済回廊（北ルート）のタイ―カンボジア主要国境であり、今後越境交通の円滑化が進み、交通量がさらに増えることが予想される。それに伴い、タイからのサテライト工場を建設するなどタイ・プラス・ワンを求める企業の動きの要所の一つとなるだろう。

かすが・ひさお　慶応大経済学部卒業、カリフォルニア大大学院政治学部修士課程修了後、電機部品メーカー社長などを歴任。亜細亜大で博士（経済学）を取得後、2013年から現職。アジア・ＡＳＥＡＮ経済やメコン地域開発、インフラと企業立地行動が専門。56歳。

福井新聞　© 福井新聞社　無断複製・転載を禁じます